

科医療センターでの研修に基づいて発表した。精神科救急相談窓口での情報処理、救急外来診察、入院治療、退院後のフォローを、短期間でダイナミックに研修できる。特に救急外来においては、緊急性の高い様々なケースを豊富に診察する機会があり、初期研修として充実している。また、外国人やホームレス等のマネージメントの難しいケースの研修を積むこともできる。

9. 抗精神病薬投与によるマウス前脳 c-Fos 発現に対する NMDA 受容体拮抗薬 MK-801 前処置の効果

柳橋 諭, 服部功太郎, 伊豫雅臣 (千大)
湯浅茂樹 (同・2 解)

定型的及び非定型的抗精神病薬をマウスに投与し、前脳での c-Fos 発現の線条体における分布を比較した。また NMDA 受容体拮抗薬の前投与による c-Fos 発現分布に対する影響を調べ、線条体における NMDA 受容体と D2 受容体の相互作用の存在が示唆された。

10. マウス線条体における抗精神病薬急性投与による c-Fos 陽性細胞の出現様式の生後発達

高橋輝久, 服部功太郎, 伊豫雅臣 (千大)
湯浅茂樹 (同・2 解)

生後発達過程にある脳の神経回路網の構築の変化を調べるため、生後40日目までのマウスに HPD を注射投与し、線条体での c-Fos 陽性細胞の出現を観察した。陽性細胞は発達に従って線条体の背外側部から腹内側部へと広がることが示された。

11. ハロペリドール投与による錐体外路症状発現機構の行動学ならびに神経機能解剖学的解析

久保田統, 服部功太郎, 伊豫雅臣 (千大)
湯浅茂樹 (同・2 解)

抗精神病薬の主要な副作用として錐体外路症状があり、現在動物モデルにおけるその指標として自発運動量やカタレプシーの測定が広く用いられている。今回我々は筋固縮の有用性を検討するため各々定量化を行い、比較検討し、筋固縮の有用性が認められた。

12. 扁桃体後核破壊によるストレス反応の変化：最初期遺伝子発現と行動による評価

藤崎美久, 伊豫雅臣 (千大)
千葉胤道 (同・3 解)

NMDA を用いてラットの扁桃体後核を両側性に破壊し、恐怖条件付けを行った。行動学的にはフリーズ時間が増加し、機能形態学的には扁桃体諸核、海馬、中脳中心灰白質の c-Fos, Egr-1 の発現が増加した。扁桃体後核は扁桃体、海馬、視床経由の恐怖条件付け反応の調節、特に抑制に関与していると考えられる。

13. てんかんの基盤における β アドレナリン受容体キナーゼ (β -ARK) の役割について

菊池周一 (袖ヶ浦さつき台)
宮城島大, 岩佐博人 (千大)
峯清一郎 (同・脳外科)
笠置泰史 (同・一生理)

扁桃核キンドリングにおける β -ARK の関与について免疫組織化学的に検討した結果、 β -ARK 1 および 2 ともに発作発症段階および形成後に免疫陽性細胞数が増加していた。また、難治性部分てんかん脳切除標本においても、spiking および non-spiking area において β -ARK 1 および 2 発現の変動が認められ、てんかんの病態生理において重要な意義を有すると考えられた。

14. 覚せい剤精神病における G タンパク質 $\beta 1$ サブユニットの意義

佐藤美緒, 和田 清
(国立精神保健研究所)
菊池周一 (袖ヶ浦さつき台)

覚せい剤誘発逆耐性現象における G タンパク質 $\beta 1$ サブユニット ($G\beta 1$) の機能的役割を解明するため、アンチセンス法を用いて検討した。その結果、アンチセンス群で常同行動の逆耐性形成が促進し、 $G\beta 1$ が逆耐性獲得に抑制的に働き、逆耐性形成時の $G\beta 1$ の発現の減少が重要であると考えられた。

15. 木更津病院における患者構成の推移

大掛真太郎, 古関啓二郎, 根本豊實
羽田野明子, 池野浩行, 高瀬美咲
渡辺基樹, 関根 博, 飛澤 彰
青木 至 (木更津病院)

木更津病院における近年の患者構成の推移を比較検

討した。当院における入院患者には8割を占める短期入院群と一部の長期入院群がある。長期入院群ではさらなる入院の長期化、高齢化が進んでいる。今後、当院においても外来・入院構造を時代に合った形へ変化させていく必要性がある。

16. 単科精神病院と総合病院精神科における外来患者の比較検討

池野浩行, 古関啓二郎, 大掛真太郎
羽田野明子, 渡辺基樹, 高瀬美咲
関根 博, 根本豊實, 飛澤 彰
青木 至 (木更津病院)
武田直己, 水野俊誠, 福留和美
(松戸市立)

17. 慢性の肛門痛を訴えた身体表現性障害の1例

鶴岡義明, 竹内龍雄 (帝京大市原)

慢性の肛門痛を訴えた73歳女性の症例を報告した。器質的所見を欠き、症状経過から疼痛性障害(心因性)と診断した。精神科入院による受容的治療と夫への治療教育により症候移動を経て、一定の改善を見た。症状の背景として、老年期の心気的不安、夫の過保護的な干渉、老年期の愛情生活のあり方等が考えられた。

18. 摂食障害が疑われた多腺性自己免疫症候群の1例

鈴木 均, 佐藤真理 (千葉県こども)
佐藤浩一, 宮本茂樹 (同・内分泌科)

吐気と頭痛が続く、食欲不振によって肥満度-40%という極度の痩せを認めた。原因となる身体的疾患がない為に、内科から摂食障害を疑われて紹介されてきた。しかし、精神科に入院して治療を進めるうちに、多腺性自己免疫症候群という非常に稀な疾患であることがわかった症例を経験した。

19. 進行性失語を呈し、前頭側頭型痴呆が疑われた1例

須山 章, 宗像 紳, 渡辺優美
鈴木浩二, 南雲清美, 小島重幸
(松戸市立・神経内科)

経過4年の緩徐進行性失語症を呈し、前方皮質症状の出現および画像所見から右優位の側頭葉萎縮及び、右側頭葉の血流低下から、側頭葉型ピック病が疑われた1例を報告した。

20. 炭酸リチウム併用療法が有効であった精神分裂病の1例

羽田野明子, 根本豊實, 大掛真太郎
池野浩行, 高瀬美咲, 渡辺基樹
関根 博, 古関啓二郎, 飛澤 彰
青木 至 (木更津病院)

妄想知覚等の思考障害に易刺激性、躁の気分を伴う精神分裂病であり、錐体外路症状により butyrophenone 系の増量が困難であった症例で、炭酸リチウム併用後に、妄想などの思考障害も改善した例を報告した。

21. 向精神薬を用いたがん性神経障害性疼痛の治療

大上俊彦, 荒川志保, 篠田直之
伊豫雅臣 (千大)
下山直人 (国立がんセンター中央・疼痛治療・緩和ケア)

国立がんセンター中央病院疼痛治療・緩和ケア部門では、がん性神経障害性疼痛に用いる鎮痛補助薬について、向精神薬を中心とした4段階のラダーを作成し、これに基づく治療を行っている。肺がん患者を対象とし、同治療法を適応した結果、良好な治療結果を得た。

22. てんかんに伴う精神症状により救急入院となった3症例の検討

中居 香, 古田多真美, 斎賀孝久
佐竹直子, 佐藤茂樹 (成田赤十字)

てんかんはてんかん発作とともにさまざまな精神症状を伴うことが多い。今回我々は、Spike-Wave Stupor, 発作後精神病, 単純部分発作重積ないしは複雑部分発作重積による精神症状のため、当科に救急入院を要した3症例を経験したので、若干の考察を加え、紹介した。

23. 青年期患者を対象とした外来グループワークの経験

長谷川正士, 永松未生, 渡辺博幸
伊豫雅臣 (千大)

青年期患者のグループワークの経験を基に、次の4点について考察した。(1)「メンバーに役立つグループを、一緒に作っている」という感覚の大切さ。(2)仲間関係の位相を理解し、グループが異なった仲間関係に開かれていること。(3)能動性の高まりに伴う、対人不安の増加への配慮。(4)つなげる役割としてのスタッフ。